



生まれ変わったも 漁師や

木下 惇

聞き手・清水高士 堀寿和
(石川県立七尾東雲高等学校2年)

自己紹介

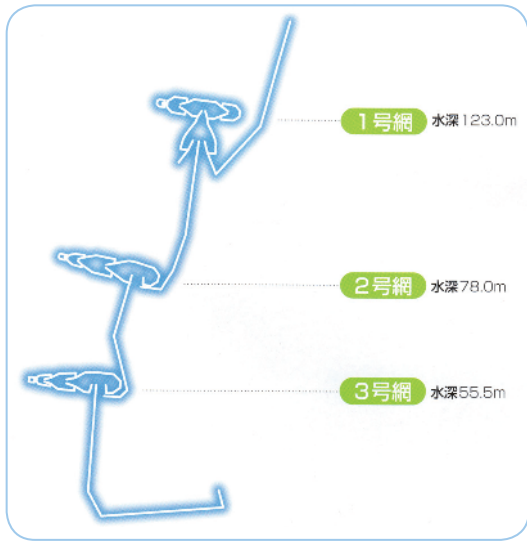
名前は木下惇。生年月日は昭和17年1月21日。出身地は、石川県七尾市の庵町というところや。兄弟は姉が2人いて、俺が漁家の長男として生まれたんや。現在の家族は俺と女房の2人。子ども2人はもう自立して、今は家に居らん。漁師をやめた後、岸端定置網組合相談役をしとったけど、今は老後を楽しんでる。

漁師になるまで

子どものころから魚が好きで、親父の漁をしとる後ろ姿は、かっこよくて、勉強も好きでなくて、当時は、勉強せん奴は漁師をさせるとか、やっぱり嫌な仕事やってんろな。そやけどまあ家も漁家でお爺さんも親父も漁師やったから別にどうっちゅうこともなかったんや。でも親父はせめて高校くらいは言っていたけれど、魚を獲るのが好きやったし、俺は中学を卒業して15歳から漁師になったんや。

漁師の仕事

漁師は出漁から出荷まで仕事なんだが、今は、朝4時に出漁の準備をするんや。この時には、船に冷海水を積み込んだり、貯水庫から氷を船に積んだりするんや。ほんで4時30分くらいに出漁で港を出るんや。出港して15分くらいで漁場に着くんやけど、場所は、七尾市白鳥区沖合約1~3kmで水深が約55m~150mの所で県から許可を貰って、定置網漁をしてるんや。まず、漁場に着いたら網を上げて魚を獲るんやけど、網にも仕掛けがあって、魚というのは大体深くて暗い所において夕方になると魚が磯に入ってくるんや。この辺の魚はほとんどが回遊魚やから、沖から磯に入ってきた魚がまた沖に出ていく時に獲るといのがこの定置網の仕掛けなんや。俺らの組合は、網を3つ持つとるんやけど、1つ大体5億円するんや。ほんで各網は年に3~4回掛け替えるんや。季節によって魚の種類はもちろん変わるんやけど、春になると、サバ、アジ、イワシ、タイ、ヤリイカ、トラフグ、サヨリが獲れ、夏には、マグロ、中メジ、アジ、ガンド、トビ、コソクラが獲れる。秋になると、アジ、カマス、フクラギ、アオリイカが獲れ、冬には、ブリ、アンコウ、スルメ、タラ、スズキ、イワシ、大メジが獲れる。その中でも、俺は、ブリとアンコウが好きやな。こういう魚を食べている時間も、漁師をやっていてよかったと思える時間のひとつかもしれない。そんで、魚を獲り終わったら、港に戻るんやけどそれが



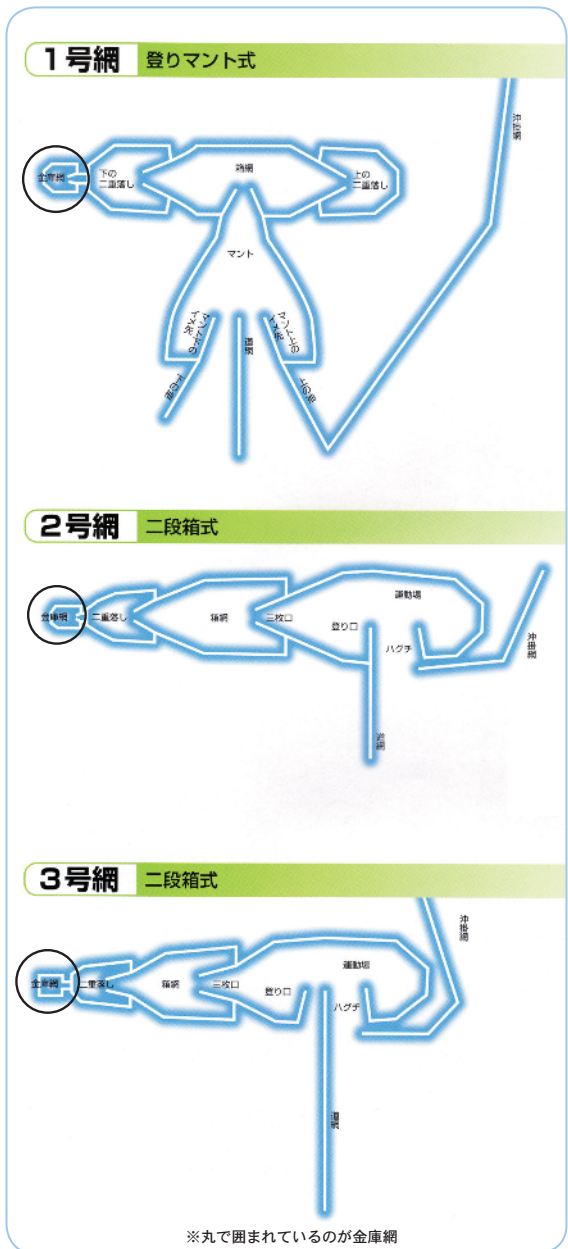
5時30分くらいで、そこから、魚の選別作業をして、市場に出荷するんや。6時20分には七尾市場、6時40分には氷見市場に、それぞれ届けられるんや。こういうのが、1日の流れやな。

漁師になりたての頃は、船酔いが見つかったな。それともう一つ、見つかったんは、仲間に入っていくこと。周りは年配者ばかりで、俺はまだ15歳やったから気をつけて溶け込むのに時間がかかったな。若いころは、3時30分くらいに港に行って、船の掃除をやるんだが、それが苦しくてな。まああの時は当たり前やと思っとったし、やっぱりその山を越さんと一人前になれないからな。15歳からわずかであるけれどお金貰えたし、まあよかったわいや。

今と昔の仕事は、大きく変わったな。今は機械化で肉体労働が減ったし、今は網を1日に1回しか揚げないけど、昔は、朝と晩2回揚げとったんや。今、考えるとよくやれたなと思うな。今それに比べたら天国や。まあ昔の網なんて、わら繊維やからな。わらとわらで編んで作った網やから、海に入れたら3か月で腐る。3か月経ったら次の網を作って入れ替えをして、全然時間がなかったな。でも雨降った時とか、海が荒れている時は漁、休みやから。まあそんなときは結構喜んだな。

大船頭になってから

昭和63年6月に組合の大船頭になったんや。その時に、金庫網というのを作ったん。金庫網というのは、魚を泳がせておく袋みたいなものなんや。市場にたくさん魚がある時、獲れた魚をすべて市場に持っていけば、市場は魚で溢れ、一つ一つの魚の値段が下がってしまうんや。でも網に魚がたくさんかかった時にこの金庫網に泳がせておけば、市場に魚が



少ないといった時、すぐ金庫網に泳がせておいた魚を市場に持っていけば、うまく出荷調整ができ、高く売れるんや。このおかげで平成元年から平成17年まで、1年で平均9億円くらいの水揚げをして、いい時は1年で12億円という年もあったな。この水揚げは俺が大船頭になる前より3~4倍も上がってな。ブリは1日に45,000本、マグロは1日に1,200本獲れた時もあったんや。この時は、やっと俺も一人前の漁師になったんかなと思っただわい。大船頭になってみんなに認めてもらったような感じがして嬉しかったなあ（笑）

昔からの伝え

先輩から漁師は『運、根、勘』の漁師の三原則を大切にしろと言われてきたんや。『運、根、勘』とは、運と根気と勘という意味で、運って言ったら、みんなと助け合って水揚げしてたくさん魚が揚がれば、運がいいなって、根気は努力で、努力をすれば魚がたくさん獲れるし、勘は、この三原則の中で一番大切に、例えば朝、沖に出た時にみんなの顔を見て、昨日けんかしたとか、酒飲んだとかわかって、そこで仕事

の割り振りを替えたりしていくのも勘やし、今日はこの網がいいんじゃないだとかも勘なんや。網に入った魚をどうするかというも、勘を働かせて作業するのがいいと思っとるんや。良いことも、悪いこともあるけど、若い時から『運、根、勘』というものを大切にしろんや。

昔から漁師の中で、『魚は暦』という言葉があって、俺らは回遊魚を獲って生活しとるんや。四季折々獲れる魚も変わって、次何の魚が獲れるだとか体で覚え込むんや。そしてその時分になったら網の入れ替えの準備をしなればいけないって勝手に思うようになるんや。魚がカレンダーになるってことかな。そこまで行ってやっと本物の漁師なんや。

俺が住んどる庵町には、伊掛山という山があって、そこには大イチョウがあるんや。そこのイチョウが黄色に染まるとブリのシーズンが来たということ。また麦が色付くと、マグロのシーズンが来たとか昔から言われていて、海と里山は昔から関係があるということなんや。

最大の失敗

平成3年に台風19号がきて、本来ならば網を揚げなならんやけど、金庫網に魚が入ったし、台風を甘く見ってたんかな。そしたら、急に強い潮が来てかって、網を全部駄目にしてしまったんや。でも2か月かかってやっと網を修復して、そこから4か月あまりで7億円くらい水揚げしたんや。

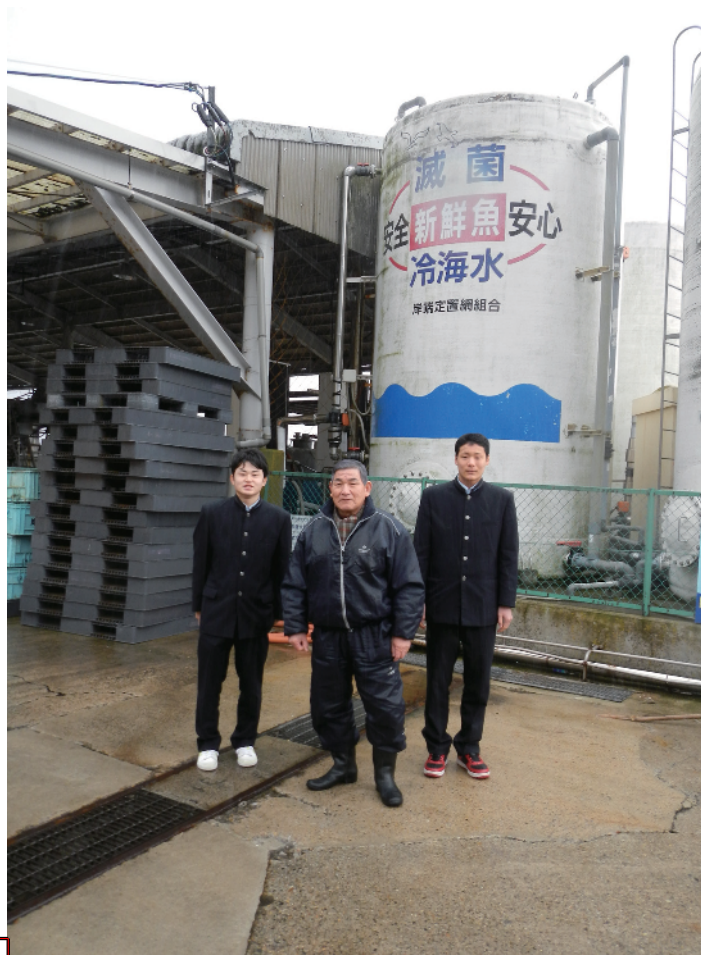
漁師という仕事から学んだこと

漁師になって先輩や後輩なんかの上下関係を学ぶことができるんや。しっかりせんならん時はしっかりしないと、なんもせんかったら、始まらんや。俺なんか大船頭になって、やっぱりみんなの生活がかかるとんやから妥協とかあんま許されんけど、妥協するところは妥協してかってやっていかんと、いつまでも喧嘩ばかりしとったら前進出来んや。まずは、海を信じ、魚を信じ、人を信頼しないとイケないだと学んだんや。

俺は魚が好きで漁師をしていたけど、やっぱり好きな事をしていたから仕事を早く覚えれたし。この仕事が得意だとか一生懸命にやるという気持ちがどの仕事に対しても大切だと思ってるんや。漁師はいい仕事。生まれ変わっても俺は漁師や。

これから

消費者は、『安全、安心、新鮮』というのを重要と考えている人が多い。それで、平成12年に組合創業70年を記念して、滅菌・冷海水製造装置と3段式選別機を導入したんや。





滅菌・冷海水製造装置は、紫外線とオゾンの力で水を滅菌させ、その綺麗な水を選別機など様々なところに使って、3段式選別機は、魚の選別作業のスピードを大幅にアップしたんや。これで『安全、安心、新鮮』なものを提供できるようになったんや。

昔は環境など考えず、ゴミなどを海に捨てたりもしていたけど、俺が大船頭になって、タバコを船の上で吸うのをやめさせたり、船1隻ずつにトイレをつけたりして、海を汚さないようにしてきたからこそ、今のような豊かな漁場があるんやと思っとる。俺が漁師をしていて得たものをすべてみんなにさげ出して、若い衆は、この豊かな漁場を一生守ってほしいな。

PROFILE

木下 惇 きのした あつし
 昭和17年1月21日生・71歳
 岸端定置網組合大船頭

石川県七尾市庵町生まれ。子どもの時から魚が好きで、父の後を追って15歳の時に漁師になった。昭和63年に組合の大船頭に抜擢され、定置網の規模や水揚げ量を全国トップレベルに押し上げた。平成10年に日本定置漁業功労表彰、平成22年には「石川ふるさとの匠（漁業、定置網漁）」に認定される。



● 取材を終えての感想 ●

私は、今回の聞き書きに参加して、最初は自信がなく、しっかりと質問をいうことができるのか不安でした。しかし、名人はとても優しくかったので、多くの質問に答えて下さいました。名人が考えた、金庫網というもので、今まで難しかった、魚の出荷調整を可能にするなど、私は、とてもすごいと思いました。また名人の話を知っていると漁師の大変さがとてもわかりました。(清水嵩士 写真：左)

名人は、昔から魚が好きで、魚を獲るのも好きで、好きな事を仕事にできるってほんとに幸せだなあと感じました。名人が大船頭になって金庫網を作ったりだとか沢山の機械を使い、安全、安心、新鮮なものを提供しているということにすごく感動しました。また様々な対策をとり海を守っているのですごいなと思いました。

(堀寿和 写真：右)

